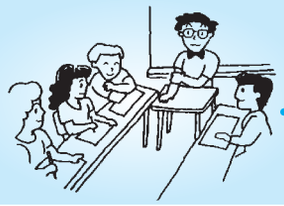

編集ボランティアのページ

●担当編集ボランティア／森　勝己、築城基裕、岩下茂子、石井恵子、堀部　麗

～認知症サポーターとは～

認知症は誰にも起こりうる脳の病気によるもので、85歳以上では４人に１人がその症状があるといわれ、今後20年で倍増すると予想されています。認知症になっても、周囲の理解と気遣いがあれば穏やかに暮らしていくことが可能です。認知症サポーターとは、認知症を理解し、認知症の方の「応援者」として自分のできる範囲で活動する人のことです。

地域では…認知症の介護家族には「近所に迷惑をかけているのではないか」という思いがあります。ねぎらいの言葉をかけることで、家族の人の気持ちはぐっと楽になるのではないでしょうか。

街角では…コンビニやスーパーなどで、支払いの計算が出来ない、高額紙幣のみで買い物をするなどといったことがよく見られるといわれます。急がせず、その人のペースで対応できれば、認知症の人も買い物を楽しむことができます。

交通機関では…認知症と思われる方が切符買うところや、どこに行くのか分らなかったりして迷っていることがよく見受けられます。さりげなく声をかけたり、場合によっては駅員さんに連絡したりして大事に至らないように気配りをしてあげましょう。

いま、「認知症サポーター百万人キャラバン」の全国運動が展開されています。認知症サポーター養成講座を受けた人は、手首に「オレンジリング」つけて、サポータであることをアピールし応援します。なお、一宮市でも「認知症サポーター養成講座」を行い、この百万人キャラバンに協力しています。

＊詳しいことは、一宮市高年福祉課（TEL28－9021）

＊参考文献～「認知症サポーター養成講座標準教材」

認知症サポーター
オレンジリング →

ボランティアって何だろう?

傾聴ボランティア講座で学ぶにあたり、「ボランティア」について改めて考えてみました。

広辞苑を引くと　①義勇兵　②自ら進んで事業に参加する人　とあります。また、インターネットで調べてみると 「志願者の意」で、自主的に社会事業などに参加し、無償の奉仕活動をする人　とあります。そして、自主的に事業に参加する「動機」には、いくつかの解釈があるとしています。（参考：ウィキペディア (Wikipedia): フリー百科事典）

a．他者のための奉仕
最も古典的なボランティアの意味で、他者のために奉仕するのがボランティアである。

b．将来の自分の利益のための奉仕
ボランティア活動は直接的な利益はないが、巡り巡って自分にも利益が戻ってくるという立場からボランティアを行う。

c．自分への投資
ボランティア活動を自分への投資と考えてボランティアを行う。

d．時間消費のための手段
ボランティア活動も、その他の余暇活動と同じように時間を消費するものとしてボランティアを行う。

ボランティアへ参加する動機はさまざまですが、活動をする時に心がけたいことは、
『人の気持ちになって考え、相手のペースに合わせて動くこと』です。

心のふれあい活動

あかつき富美寿会

私達の会は、今年で34年目になります。趣味でおぼえた舞踊でありますが、明るい社会づくりにお役に立てばと、日夜練習に励んでおります。

会の理念でもある「心のふれあいの場」をモットーに地域で開催される福祉活動や老人施設の慰問を継続できる様に頑張っていきたいと思っています。

今年度は一宮市をはじめ、津島市海部郡の老人施設、各施設で行われる行事、盆踊り大会に参加して喜ばれております。

琴伝流大正琴　琴稀会

私達琴稀会は、平成5年に結成され、今年で16年目を迎えました。ソプラノ・アルト・テナー・ベースのアンサンブルで大正琴の音色を味わいながら、童謡唱歌・演歌・民謡等の曲をみんなで楽しく演奏しています。

ふれあいの集い・福祉のつどい・福祉施設の慰問など地域の皆さんと交流をしながら、ボランティア活動を行っています。

多くの方の喜んでいただける笑顔が大きな充足感となって、日々練習に励んでいます。

練習日は、毎週金曜日と土曜日午後1時から尾西文化広場で練習しています。

お問い合せ先　　あかつき富美寿会　近藤すみ子　TEL62－4072
琴伝流大正琴　琴稀会　不破　清子　TEL62－3023

The Cinema Review of Welfare　～映画で“ふくし”を想う時間（とき）～　VOL6

今回紹介する映画は、「ホテル・ルワンダ」

2004年南アフリカ/イギリス/イタリア合作、2006年日本公開

“善”と“悪”人間同士の驚愕の実話です！

アフリカの小国ルワンダで実際に起こった民族紛争を舞台にそこの有名ホテルで働く支配人ポール・ルセサバギナ（ドン・チードル）の愛と勇気の奮闘を描いた感動と驚愕のノンフィクションストリー。

1994年ルワンダでは長年続いた「ツチ族」と「フン族」の民族間の争いが大虐殺に発展し、100日で100万人もの罪なき人々が惨殺された。（ルワンダ大虐殺）アメリカやヨーロッパ、国連までもが小国の「第三世界の出来事」としてこの悲劇を黙殺した。地元有名ホテルの支配人であったポールは、妻がツチ族でフン族に狙われていたため、最初は何とか家族だけでも救おうとしていた。しかし、彼を頼りに集まってきた人々や親を殺されて孤児になった子供達を見るうちにポールの心に変化がおきた。「この人達を見捨てることはできない。そうしなければ一生後悔する」と立ち上がった彼は、たった一人で虐殺者たちに立ち向かった。

ホテルマンとして培った人脈と巧みな話術、機転のある行動で虐殺者たちと懐柔し、翻意し、時には脅しながら1200人余りの命を守り抜いたのだ！

余談ですが、この映画「ホテル・ルワンダ」の公開は当初日本では予定がありませんでしたが、20代の若者が先立って、公開のための署名運動を展開、約3ヶ月で4000人を超える署名を集めた結果、日本公開が決定したそうです。（それでも当初は渋谷のミニシアターのみだった）ズバリ、“観るべき映画”です。この現代において、同じ人間同士が…実際に行われた衝撃の事実です。今現在この瞬間にも世界中のどこかで大小さまざまな紛争が起きています。いずれも人間同士です。私たちが住む現在の日本では想像できないことばかりで、実際に何もしてあげられない場合がほとんどだと思います。いや想像する気もない人がほとんどかもしれません。だからこそ、まずは想像してみること、思ってみることが大切だと思います。